

運動動作の見取りに関する研究

—ダンス指導の検討へ向けた基礎調査—

河合史菜（岡山理科大学）

1. はじめに

身体表現であるダンスにおいて、“身体の動き”を見て想像を豊かに働かせることは、重要な意味をもつ。しかしながら筆者自身、舞踊教育に携わる中で、学習者の動きの見方は実に多様であることに気づかされた。同じ動きを見ても、想像を膨らませて見ようとする者や、そもそもどう見ればよいか分からない者など学習者の前提が異なる。先行研究では、意図のある動きの伝達や受容について明らかにしたものは数多く見られるが、そもそも人は身体の動きを目にして想像的な世界を見取ることができるのか、何をどのように見取っているのかという観点から検討された研究は見られない。表現の伝達や受容の前提にある、学習者の動きの「見取り」を把握することは、ダンス指導の基礎資料になるものだと考えられる。

そこで本研究では、題材やテーマを介さない単純な運動動作としての“身体の動き”から、何をどのように捉えるのか、動きに対する「見取り」の枠組みを明らかにする。具体的には、8種類の運動動作から見取った内容を把握し、意味内容の分析を通して、「見取り」の枠組みを提示する。

2. 方法

1) 運動動作の設定

本研究では、動作の性質に偏りが出ないように、8種類の運動動作を設定した。先行研究を踏まえて、「時間性」「空間性」「力性」の3要素の視点から、性質が異なる（対極となる）動作を設定し、舞踊専門学生が示範した映像資料として収録した。すなわち、速いと遅い、大きいと小さい、強いと弱い、を意図した動作である。なお強い動作は2種類を設定し、加えて、特段の性質を意図しないジャンプ動作も設定した。設定にあたっては、舞踊研究者2名の協議の上で決定した。

2) 調査対象・期間

対象：A大学・大学生 140名

期間：2022年5月13日

調査手順は、①1動作の映像を視聴する。②視聴した動作について、何をどのように見たか質問紙（自由記述）へ回答を求める。③8種類の運動動作に対して①②の手順を繰り返す。

3) 分析方法

先行研究を参考に、得られた自由記述をカード化し、意味内容の類似性・相違性を検討しながらカテゴリを生成した。この過程を繰り返し、最終的に数個のカテゴリになるまで行った。

3. 結果と考察

自由記述により得られたカード数は、全1641件であった。分析の結果、「視覚像」「技術・能力」「思想感情」「自然現象」「生活事象」「分からない」「疑問・違和感」「動作の予感」という計8つの上位カテゴリが生成された。それらの結果から、動きの見取りには、大きく「視覚的」と「想像的」の2つの枠組みがあることが考えられた。

視覚的な見取りとは、運動動作の視覚像を捉えた見取りである。例えば「手を上げ左から右へ回す動作」「腕を上げた状態からしゃがんで丸くなった」などの回答に見られるように、動作の手順を正確に説明しようとするものや、「回る」「ジャンプ」などの回答に見られるように、視覚的な要素のみで捉えたものが挙げられる。これらは、目にした“身体の動き”そのものを視覚的に見取ったと考えられる。一方、想像的な見取りは、「泳いでいるように見えた」「ひまわりが夜になりしぼんだ動作」などの回答に見られるように、運動動作から別の現象を捉えた見取りである。想像的な見取りには、植物や動物、遊びやスポーツ、物語、抽象概念や非具象的な感情・感覚など、人々の生活に根づく多種多様な現象を捉えた回答が見られた。

以上、本研究の結果、同じ動作を目にしても、動きの見取りは「視覚的」と「想像的」な枠組みがあることが明らかとなった。